

フレーベル 著

「リナは如何にして読み書きを學ぶか」(四)

—— 楽しく忙しく動く子供達のための美しい物語 ——

莊 司 雅 子 譯

リナは今まで——それを豫感することなく、況してもとから知つてるといふこと、更には何か或る一定の言葉で示すといふことは尙更出來ないのであるが、併し生活や行いや感情や情緒などにおいて——多面的な生命一致 (Lebensgemeinschaft) にまで教育されていた。そしてまたこのように注意深い母に依つて、考え深く情緒に満ちた子供の中に、殆んど未だ衝動にまで至らない次のような微かな豫感が次第に育くまれるようになった。即ち両親特に留守中の父、その他リナの愛する纏てのもののために、永遠の神、即ち私達が受けそして樂しんでる一切の善きものをお與え下さる永遠の神に彼女が得させて上げたいと望むものを祈願するといふ豫感。そしてこのようにして母が昨夜の會話の最後に言つたことを想い出しながら、無意識にそして彼女自身にもやつと聽えるほ

どの無邪氣な言葉で、胸の中の希望を次のように言い表わした。「すべての善きものをお與え下さる神様、今日もまたお母さんや叔父さんが期待していらつしやる喜びを、私がさし上げることが出來ますようにして下さい。」

元氣よくす早くリナは服を着換えた。心から熱心に育む母の愛が、子供にその日その日に就いてこんなことを教えた。即ち各々の日は彼女にとつて更に目に見えない祝福の源を示す尊敬すべき贈り物であるといふことを。そしてそのようにして簡單ではあるが榮養のある朝食を樂しくすませた。リナはすぐ昨日の母の最後の言葉を想い出し、元氣よく大事な本を持つて來ると、先づ第一に出來るだけその本の中にまだ残つてゐる他の大文字をしつかり認めようとした。

順々にそして實に色々の比較に依つてとうとう彼女はUの

中にHを、Pの中に卵を、Oの中にDを、Dの中にDを、Sの中にGを、Aの中にRを、Hの中にGを、Mの中にRを、Nの中にRを、Wの中にRを、Vの中にRを、Cの中にGを、Gの中にGを、Eの中にGを、最後にZの中にRを認めた。

このようにしてまだ晝にならないうちに、リナは今まで自分と父との間で用いて来た全部の文字をその本の中に示すことが出来た。

母はまだ家事に追われていたために、家族部屋に來ることが出来なかつたが、併しリナは母の戻つて來るまで待つことが出来なかつた。リナは自分の大きな喜び——今まで彼女と父とが使つてた總ての文字を、彼女の大事な本の大文字の中に示すことが出来たという大きな喜びを知らせるために、まだ仕事の最中にある母を家中探し廻つた。

「すぐお部屋に行きますよ」と子供の喜びを共にする母が言った。

「たとえ若し今叔父さんが見えても、私は全部叔父さんにも示すことが出来ましてよ。だつて叔父さんは確かに私がもうお父さんの美しい本の中の大文字を、全部知つてるなんて御存じないでしょうし、またとても信じなさいでしょうから。もう叔父さんがいらつしやりそうなのですから。ほんとうに今日は何時もよりもつと長くいらつしやればいいわね。」
「そうね、何時もよりも長くいらつしやることは出来ないでしょう」と母は慰めるように答えた。「叔父さんは屹度いちつしやるでしょうから落着いてちつしやい。」

いよいよ待ち焦がれていた叔父がやつて來た。リナの眼差しの何と輝いていることよ。彼女は嬉しそうに父の贈り物を叔父に差し出しながら、彼女の昨日以來の進歩をすつかり叔父に話すことが出来た。

叔父はほんとにリナが熱心に勉強して得た喜びを自分も心から共にした。彼は更に次のことに依つて少女の歡喜を一層高めた。即ち違つた頁のところやずつと離れた頁のところに同じ文字を、或る頁、而も同じ頁に多くの違つた文字をリナに探し出させたのである。

遂に愛する母もこの幸福な二人の仲間入りをした。彼女は心から彼等の喜びを共にした。母に近くよりせい、そして如何にも母から得たすべてのものに全力を注ぎつつ而ももつと多くを渴望しているかのようなその幸福な少女自身から來る喜びと同じほど彼女は叔父の心から來るその喜びをも共にした。リナも嬉しそうに輝いた眼差しを時々叔父の方の方にやつた。叔父の同情的な澄んだ輝きも、恰も彼女が心の中で欲しているものをもつと明瞭に示してやるような輝きであつた。

晝食が終るや否なやリナは二つの寶物である本と父の手紙とを持つて、何時も食卓についたまま、尙暫くそのささやかな集いに留るを常としてゐる叔父の側に掛けた。もう一度彼と共に兩方の文字を比較して、その類似點や相異點を見附けたり、認めたりする喜びを有ちたいと思つて。晝食後の一寸したおかたづけをしていた母も、間もなくこの楽しい集いの第三人目に加わつた。やがて三人に依つて一つの單純な包括

的な法則がそこにあるということが、はつきり認められた。それに従えば先づ第一に普通の大きな活字は大抵直線から出て来ているということ。つまり第一の眞直ぐな線の文字は、第二では大抵曲つていたり、或いはかまに僅かに曲つた線であつたりする。そして第一の簡單に曲つた線は、第二においては非常に鋸齒狀に而も偏した線に變つてゐる。併し兩方の文字は、敢も内部の構造やその部分の組合せなどに従えば互いに全く一致してゐる。

こうしてリナは今や非常に早く大きな活字を認め得るようになった。併しこんな時、リナは嬉しそうに振舞うよりは寧ろ不意に悲しそうに母の方に向つて、「でもお母さん、私は今だつてまだ本を讀むことが出来ないではありませんか。だつて大文字なんてほんとに少ししかないし、それにどの言葉も何時もたつた一字しかついていないのです。(譯者註、獨逸語では文章の初めの文字と名詞の頭文字とは全部大文字になつてゐる。)それに小文字はこんなにも澤山あるんですもの。どうすれば私は今これらを全部覚えられますでしょう。ねえ、教えて頂戴。」

「心配しなくてもいいのよリナ」と母は落着いて言つた。彼女が部屋にはいつて來た時から既にこの願いを豫期していた母は「此等の文字はリナが今まで既に知つてゐる文字よりも、そんなに多くはないのですよ。たゞほんの二三違ふところがあるだけです。若しリナが今までと同じように注意深く自分でやればきつと此等の文字も全部らくに學ぶことが出来るで

しよう。」さあこれで私はもう明日の楽しみが出来た」と座席を立ちながら叔父が言つた。「今日はこれでお別れしなければならぬ。リナも知つてゐるようにお仕事があるからね。では明日も今日のように楽しく會いましょう。」

「きつとね」と母が言つた。

「はいきつとよ」と子供が言つた。「若しお母さんがまた助けて下さるならね。」

「ではお願い」とリナは叔父が出るや否なやそれだけ言つた。併し母はリナのこの「お願い」という簡單な言葉の意味を理解した。

「ではお母さんの側にお掛けなさい。お父さんの二つの贈り物を持つておいで。お母さんはほんの少しだけリナに話せば十分ですよ。そうすれば間もなくリナ自身で出来るから。そしてその方が楽しいから。というのはリナは丁度今また新しいことを實際覚えますからね。何でも自分で學んだものは人から學んだものよりも、もつと大きな喜びを得るばかりでなく、——というのはそんな時人は自分で活動するという快い力に満ちた感情が湧くばかりでなく、こうして學んだものは全部非常にたやすく覚ええますし、またたやすくそれを再び應用したり使つたりすることも出来るものですから。」

「では先づどの文字を初めに學びましょうか。言つてごらん。」

「ここにさがあるわ。」

「それではリナが今まで知つてゐる文字のうちで、どの文字か

ら直線が曲線に變つてゝになつたか言つてごらん。」

「ここからです。」

「そうです、 S はまるで I から芽生えて來たようなものですよ。丁度種子から出て來た二葉か、それとも蕾から出て來た多くの葉のついた花のようなものです。併しリナはまたこんなことを知つてるでしょう。私達がほんとにもう何回も散歩の時や私達のお花を見ながら不思議に感じながら氣が附いたことだけど、何と澤山の葉や花瓣のある花や果物の花等が再び、ほんとに單純な種子に戻つて來るかつていうこと。まるで再び自分のうちに集結するように。ですからリナちゃん、ほんとに澤山の事物と同じように其等のものも先づ再び小さくならなくてはなりません。つまり彼等が眞に用いられることが出来る以前に、自己の中に收縮し集中しなければなりません。このように私達の大きな活字も同じことです。即ち其等が澤山の目的に用いられたり多くの喜び——此等は（讀むことに依つて）もともとそうするようになってますが——提供出來るより以前に、先づこの装いや飾りを自己の中に集結させなければならぬのです。さあではもう一度見ましよう。」

「もう一度本の中を探してごらん。全部の小さな活字のうちのどれがほんとに S と I とを表わしてるか。」

「この字だと思ひます。」

「全くその通りです。お前は S の中の曲つてる全部の太い線や細い線や飾り等を i の中にも見附けることが出來ました

ね。其等の線は收縮して消えてしまつたのです。ただ上の飾りだけが自由に獨立しています。併しそれでも一つの小さな點に收縮していますね。さあそれでは S と i とに就いて私達が見分けたものをもう一度較べてみましょう。そうすれば兩方の違つてゐるところと似てるところとが、お前に正しくはつきり生き生きとなり、同時にお前はそれを他の文字の中からも、更に見付けることが出来るでしょう。さあではどの小さい文字が S を表わしていると思ひますか。併し前からリナに言つたようにリナは澤山の飾りのものを切り離し、そしてただ主なものだけを掴まなければならぬのです。では曲つてゐる中央の線の外に、ほんとに S の主なものといへばどれでしょうね。」

「その右側の小さい鉤は曲つた屋根のように、思われます。小さい左の上の方に曲つてゐる線はきつと落ちて無くなるでしょう。」そうです。私もそう思ひます。「では今度は小文字の中でどれが大文字の S と一番よく似てゐるか探してごらん。」

子供は本の中を試して見たり、較べて見たりして探した。そしてどこか疑わしげな風をして母を見た。同時に本の中の F を示しながら。

「さあ正しいかどうか見せて頂戴。第一に主な線はこれですね。ただ垂直に眞直ぐに伸び、そして少し曲つてゐるだけですね。第二にここにも右に小さな鉤がありますね。曲つてゐる屋根のような主な部分もまだ残つてゐるわけです。ただ左の方のかさく曲つてゐる線が消えてゐるだけです。さあごらん。ほんと

に當りましたよ。小文字の f は大文字の F を示しているのです。」

「ではもう一つ大文字と同じ意味のものを、小文字の中から見附かるかやつて見ましょう。そしたら今日はもうこれで十分にしましょう。お母さんにはお仕事がありますから。私は D を考えて見ましょう。先づ前以てもとの文字の D と何度も較べてごらん。どれが主な部分であるかを見附け、それから小文字の中から探し出すように試してごらん。」

長くはかからなかつた。而もリナは前よりもつと確信を以てりを示した。

「ごらん今度もリナはほんとにたやすく而も早く見附けることが出来たでしょう。ほんとにお母さんは嬉しいのよ。だけど今度は更に三つの文字 D、D、b を互いに近寄せて、それが正しいかどうか見て見ましょう。なるほど正しいですね。主線はどの文字にも着いてます。第一の文字にはしつかりと曲つており、第二の文字では全然直線だし、第三の文字では兩方の中間位ですね。曲つてる主な部分の主線もまた三つのどれにもあります。併し第一の文字では下の方に曲り、第三の文字では反對に上の方に第二の文字では中位に、そして兩方とも上から真直ぐではないですね。」

一では今日はこれぐらいでやめにしましょう。リナも知つてるように、お母さんは家の中のことには氣を配らなくてはなりませんから。併しリナちゃん、若しリナがもつとしたいならきつとたやすくリナの知つてる大文字と、まだ知つてない小

文字との間に、更に澤山の似た點や同一な點を見附けることが出来るでしょう。そしてその見附けたものを明日お母さんに示してくれることが出来るでしょうね。では好きなことをしてお遊び。」

「それなら私も一度幼稚園に行きたいのですけど、いいかしら。」

「ああいいですとも。お隣の小さいメンナちゃんをお誘いして一緒に行つてらつしやい。」

「ああ、そう出来たら嬉しいわ。小さいメンナちゃん大好き。ありがとうお母さん。」

二人の子供が手に手をとつて楽しそうに幼稚園に行つた。ついこの間まで二人が一緒に行つてた幼稚園に。二人の中の小さい方のメンナはまだ普通ぐらいの發達であるけれどリナはこれに反して屢々父の留守の間、母が彼女をよく見てやることが出来ただけで、もう幼稚園よりも遙かに進歩し、そして長く待ち焦がれていた父が歸へれば、もう小學校に通わなければならぬくらいになつた。

さて彼女の幼い遊び友達や仕事の仲間にとつて、彼等が愛していたものが、仲間からこんな長いこと（彼等にはそう思われた）離れた後に、再び會うことは何という嬉しいことであつたらう。そしてリナもまた彼女が嘗て屢々仲間になり、そこで實に屢々榮しく朗らかに過したその集いに加わつて如何にも幸福そうであつた。

彼女がその間、家で何をしていたか、また何をしつゝある

かに就いて、方々から尋ねられることは全く自然なことではなからうか。保母も喜んで、リナに此等の問いに答えることを許した。それに依つて幼い聴き手達は、如何に子供は家庭でも活動しているか、又如何に善い子供達はこんなにも活動的であるかを聴くことが出来た。というのは保母は家庭におけるリナの活動を知つてたから。

併しリナは先づ第一に何に就いて話したか、先づ彼女の美しい本に就いて話した。——彼女の心はそれに就いて一杯だつたから、彼女が旅行中の父に手紙を出したので、父が彼女に送つてくれたその本に就いて。

「手紙を書いたんですつて！」と聴いてた子供達が驚きの眼をして叫んだ。「何處で習つたの？——誰が教えてくれたの？——どんなにして教はつたの？」これやあれやの質問が一度に彼女におしかかつて来た。彼女は先づ最初に母がどんなにして棒片で自分の名前を並べることを教えてくれたかを話した。「やつて見せて頂戴。おやつて見せて下さらない？——どんなにして棒片でああなたのお名前を並べるかを。」
「そうです」と子供達の會話を靜かに聞いてた保母が言つた。そして再びどのようにして子供達が無意識のうちに子供達を教え、また喜んで子供達から學ぶかを確かめた。「そうです。」それを私達にやつて見せて下さいね。私達は圖形並べの棒片を有つてますから丁度好いですね。さあ机の眞中にいらつしやい。そうすれば他の方もよく見えますからね。」

そこでリナは彼女の名前を並べて小さい友達に見せ、それ

の符號 i と a、l と n とを示して見せた。

「私の名前も並べられるの？」とすぐ傍に立つてたメンナが甘えるように尋ねた。

「えゝわけないわよ。」とリナは言つた。「きいてごらん、あなたのお名前は私の名前と殆んど同じように響くから。メンナ、リナ、そら初めの音だけが違つてるでしょう。そして眞中の一つの音が重なつてるように聴えるわね。だからただ初めの符號が違つてるのと眞中の符號が二重になつてるだけのことね。」このようにしてリナはたやすく棒片でメンナの名前をも並べることが出来た。

「ああ私達もみんな自分の名前だけでも並べられるといいわね。」と全部の大きい子供達が叫んだ。

「私達にも教えて頂戴ね。」

「ええ、でも先づ初めに自分の名前を正しくはつきり發音してから、その一つ一つのものを見附けるようにしなければならぬのです。こうなのよ、先づ名前の中の開いた音と閉じた音とを區別し、そしてそれぞれの音に就いて適當な符號を覺えることを學ばなければならぬの。これはでもお優しい園丁さん（これは子供達が彼等の親愛なる保母を喜んでこのように呼び、逆に保母はまた子供達を植物や花にたとえて呼んでるのである）が、きつと喜んでみんなに教えて下さるでしょうよ。丁度優しいお母さんが私に教えて下さつたように。」

「ほんとにそうしましょうね。」と嬉しそうに園丁さんは優

しく答えた。「ただ私達は先づリナちゃんを私達に言つた一つのことを果さなければなりませんね。つまり先づはつきり自分のお名前をよく響くように言はなければならぬといつてことですね。」

「はい承知しました、そうしましょう。」彼女の言つたことを理解したすべての子供達が言つた。その中の二三人は可愛らしく園丁にすがりついてゐた。その他のものは楽しそうに幸福な少女リナの澄んでる眼を嬉しそうに感謝の心で眺めていた。その中の二人はその健康な腕で、今や早くも行くこととしてゐる友達に頼むように巻きついた。

「いいえまだ行つてはいけないわよ、リナちゃん、ねえ、そうぢやないこと？」と一同が向きを換えて乞うように優しい保母に尋ねた。彼女に依つて子供達の希望が確實に成し遂げられることになつてゐるその保母に。「ええ、でもリナちゃん好みのようにさせなくてはなりませんね。」と彼女は答えた。そしてリナが答えるより前に、もう他の子供達は、彼等の好きな遊戯である「小鳩」の圓に寄り集つた。そして間もなく第二・第三の遊戯が續けられた。それでもリナは眞面目に歸り仕度をした。彼女と特に親しくしてゐた二人の少女はもう一度彼女を抱き、そして頬に接吻して言つた。「すぐまたいらつしやいね。今日はあなたは私達にいいことを持つて来て下さつたわ。」「そうだよすぐまたいらつしやいね」と五歳ぐらいになる健康そうな力強い男の子の聲が繰返えされた。彼は同年輩の二三の友達と一緒にこの小さい先生の静か

な聴取者でもあれば、考え深い傍觀者でもあつた。

そして殆んど知らず識らずに頭で愛想のよい「はい」をうなづきながら、リナは戸を締めて消えて行つた。といふのは彼女自身殆んど無意識ではあるが、子供達の注意が（一つの發展は常に他の發展を要求するから）彼女の心の中に、家での母の希望と期待とに對しても努力しようという、一つの熱望を惹き起さしたからである。

「さあごらんなさいよ」とあらゆるものを利用して幼児達を彼等の周囲の生活現象の觀察へ、時には自己の生活と行爲とに關する注意に導こうとしていた無邪氣な園丁さんが言つた。

「ごらん！ 何と美しいことではありませんか。若し人が何かを知つていて、そしてその上それを人に教えることが出来た時、何と素晴らしいことでしょうか。リナちゃんは皆さんの中の一番大きい方よりも、ほんの少し大きいだけです。而もつい暫らく前までは皆さんと私達全部の遊び仲間だつたでしょう。それなのに、もうリナちゃんは今いらして私達に大へんいいことを教えて下さいましたね。ですから皆さん、人は注意と熱心とさえあれば、たとえまだ小さくても、更に他人のために大切なものになれるということがお解かりになつたでしょうか？」（つよく）